この論文の目的は、大学院のゼミの談話における配慮表現について、質問者の前置き表現ストラテジーの比較によって明らかにすることである。配慮表現の効果はコミュニケーションをスムーズにすることであるため、この分析は日本語を勉強している留学生などにとって会話力の上達を支援する可能性がある。また、日本語学習者にとって初対面または親しくない人に質問をする際、適切な前置き表現ストラテジーの使用によって会話の一つの難関を乗り越えられる。研究の資料の分析でどんな前置き表現をいつ使えばコミュニケーションをスムーズにできるかをこの論文で理解しようとする。

大学院のゼミの談話における配慮表現について扱った研究には野田（2014）、陳（2007）や大塚（1999）などがある。まず、野田尚史は主に配慮表現はなぜ使われる、配慮表現の現れ方、種類、機能やとらえ方について述べる。野田氏によると配慮表現は「悪いけど」のような前おき表現や、携帯メールで使われる笑顔を表す絵文字のように、相手に悪く思われないようにするための手段である。また、配慮表現はこれまでの研究で見落とされがちだったが、現実のコミュニケーションでは重要であり、詳しく研究する価値がある。配慮表現は、依頼や拒否、謝罪など、相手への働きかけが強い場合に現れやすい。配慮表現は、形式から見ると、文末のモダリティ表現や、間接的な表現、前置き表現などの種類があり、機能から見ると、断定緩和や、共感表明、負担表明、謝罪などの種類がある。野田氏は配慮表現の研究は、言語形式から出発するのではなく、互いの人間関係を含めた場面や状況から出発し、そこでどんな言語形式が使われるのかを分析する方法が基本になると述べる。

陳臻渝は「メタ言語表現」を前置き表現と非前置き表現とに二分するため、前置き表現はディスコースにおいてその後に続く主要な言語内容を導入するという機能を持つ、話し手の、その後に続く主要な言語内容の命題・事柄の成り立ちに支障が起きない、文中における位置は主要な言語内容の直前に限られていると定義する。陳氏は配慮表現を対人配慮型と伝達性配慮型対に分け、さらに次のように下位分類する。人配慮型には詫び表明（聞き手に詫びることによって対人関係に対する配慮を示す）、理解表明（聞き手の気持ちを受け入れて、聞き手の立場に立って同意や共感を表明することによって対人的配慮を表す）、謙遜表明（話してが自分自身のことを謙遜することによって対人的配慮を示す）と釈明提示（話し手が自分の言動について解釈を行うことを通して対人的配慮が表される）。伝達性配慮型には話題提示（伝達話題を予め明確に提示することによって、伝達性への配慮を表す）と様態提示（話し手がどのような様態で発話するかを提示して伝達性への配慮を果たす）。

大塚容子はテレビ討論における前置き表現を「ポライトネス」の観点から分析する。大塚氏は積極的配慮によるストラテジーと消極的配慮によるストラテジーを比較し、積極的配慮によるストラテジーは合意点を捜す、否定を避ける、共通点を主張することや楽観的な態度をとることだと述べ、消極的配慮によるストラテジーは間接的な表現を使う、疑問文や生け垣表現を使う、聞き手に対する負担を最小

限にすることだと述べる。大塚氏は前置き表現は疑問文や生け垣表現を使うことと同じであるため、消極的配慮に当たると述べる。

しかし、大学院のゼミの談話を対象に、質問者の前置き表現ストラテジーの比較という観点から扱った研究はない。そこで、私は質問者の前置き表現ストラテジーの比較で分析を行うことにしたい。

研究の資料は、2015 年 9 月に、神奈川県の三浦半島のホテルで行われた都内の大学院の某ゼミナールの 40 分程度の談話二つの文字化したものである。一つは、絵本による多読を経験した成人学習者（日本語学習者・韓国語学習者）へのインタビュー調査の研究について発表した後、発表者と発表を聞いていた大学院生の質疑応答の談話の文字化である。この談話で現れる人物は発表者Ａ、質問者Ａ、質問者Ｂ、と先生である。もう一つの資料は、日本語学習者のレポートを書く力を詳しく理解するための因子分析について発表した後、発表者と発表を聞いていた学院生の質疑応答の談話の文字化である。この談話で現れる人物は発表者Ｂ、質問者Ｃ、質問者Ｄ、質問者Ｅと質問者Ｆである。そして、この二つの資料の文字化データから配慮表現の観点からデータを抽出し、質問者の前置き表現ストラテジーの比較によって分析を行った。

まずは、質問者Ａが言う「あのー、わたしもわりと、なんていうか、頭が固い、日本語教師になりつつあるという感じで｛笑い｝」から分析を始める。質問者Ａは自分を「頭が固い日本語教師」と表すことによって自分の性格を軽く批判することによって自分の地位を低くする。つまり、話し手が自分自身のことを謙遜することによって対人的配慮を示しているため、質問者Ａは陳氏が定義する謙遜表明という前置き表現の類を使用している。また、質問者Ａがこの後聞く質問について解釈を行っているため、この前置き表現は陳氏が定義すると釈明提示にでもあたる。質問者Ａの質問の内容は次の通りである「日本語教師のなかでも、絵本もあまり向かないていう指摘があって、日本語教育においても、たとえば、まあ、ちょっと成人の学習者には、絵本だと、まずたとえば、学習者が抵抗を示す、子供っぽいっていうのもありますし、語彙の面でも、このー、あ、そうですね」。この質問は成人学習者を絵本を読ませるのは適切であるかを疑問にしているため、発表者のフェイスを侵害する可能性がると思われる。つまり、質問者Ａが謙遜表明の前置き表現を使用した理由はこの可能性を配慮したためだと思われる。

質問者Ｂの「話が簡単な方に戻るんですが。」は質問者Ａと同じようにこの後聞く質問について解釈を行っているため、釈明提示にあたる。

質問者Ｂが聞く質問は「インタビュー、学習者としてのインタビューは、韓国語を学習している方にも」。

先生「…たとえばですけど、すごく複雑なことを整理してしまいますけど、」

質問者Ｅ「自分が使ったことがないので、あのー、あんまり詳しくないのですけど」

参考文献

野田尚史（2014）『配慮表現の多様性をとらえる意義と方法』くろしお出版.

陳臻渝（2007）『日本語会話における前置き表現』大阪府立大学大学院人間社会学研究

大塚容子（1999）『テレビ討論における前置き表現』岐阜聖徳学園大学紀要. 教育学部外国語学部